

平成29年 2月28日発行

静岡県

## 図書館協会

会報 No.68



編集・発行 静岡県図書館協会

静岡市駿河区谷田53番1号  
静岡県立中央図書館内

## 平成28年度 第24回 静岡県図書館大会

## 「伝えよう図書館の力 広げよう新たな可能性」



日付：平成28年11月7日（月） 参加人数：952人

会場：静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ（静岡市駿河区）

大会は、大沼裕幸大会運営委員長（函南町立図書館長）の司会により、河原崎全県図書館協会長（県立中央図書館長）の挨拶の後、吉林章仁副知事から祝辞をいただきました。

続く表彰式では、「読書県しずおか」づくりにおいて意欲的な活動が評価された学校・団体、長年にわたって図書館業務に携わり功労のあった図書館職員及び熱心な活動のあった優良読書グループが表彰されました。

その後、日本図書館協会副理事長の山本宏義氏による情勢報告があり、公共図書館と学校図書館の状況、最近の注目すべき事項についての説明がなされました。

午前の最後に行われたライブトークでは、「図書館の意義、本の意義とは？ ～災害時の図書館をきっかけに～」をテーマに、パネリストに佐藤健二氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）と塚田薫代氏（静岡県立こども病院医学図書室医学司書 ヘルスサイエンス情報専門員上級）、コーディネーターに石井正己氏（東京学芸大学教育学部人文社会科学系教授 一橋大学大学院連携教授）を迎え、「図書館の本と力」、「医療と図書館の関わり」、「災害と図書館」について、それぞれ3人の専門領域を踏まえたお話をうかがいました。

午後は、6つの分科会に分かれ、各テーマ別に様々な講演や事例報告、ワークショップが行われました。

なお、表彰された方々は、次のとおりです。（敬称略）

## ☆「読書県しずおか」づくり優秀実践校・団体（者）表彰

- ・小学校の部 湖西市立東小学校
- ・中学校の部 静岡市立長田西中学校
- ・高等学校の部 静岡県立沼津西高等学校
- ・特別支援学校の部 静岡県立静岡南部特別支援学校
- ・団体（者）の部
  - おはなしきしゃポッポ（静岡市）
  - ぬまづ子どもの本を学ぶ会（沼津市）

## ☆静岡県図書館協会表彰

- 渡邊 基史（三島市立図書館）
- 原 博男（沼津市立図書館協議会）
- 宮本 桃代（富士市立西図書館）
- 中山 祐子（富士宮市立中央図書館）
- 二橋 裕美（磐田市立中央図書館）
- 清水 規子（磐田市立豊岡図書館）
- 豊田 ますえ（袋井市立袋井図書館）
- 松下 昭重（静岡大学附属図書館）
- 田中 純子（常葉大学附属図書館富士図書館）

## ☆優良読書グループ表彰

- ・(公社)読書推進運動協議会長賞
  - ひろみ文庫（富士市） 山田 千津子
- ・静岡県読書推進運動協議会長賞
  - 三島市立図書館音訳ボランティアグループ（三島市） 佐藤 由紀子
  - 富士朗読の会 ピーターパン（富士市） 藤澤 清子
  - おはなしくれよん（静岡市） 今戸 伴子
  - おはなしパレット（牧之原市） 植田 由美子
  - みずのわ（袋井市）



表彰式の様子

## ライブトーク（抜粋）

### 【図書館は森、森を育てよう】

佐藤 図書館のイメージは、森みたいなものだという感じをもったのです。図書館は森であると。書物について、自分でもいろいろ勉強するようになって、また経験するようになって、この確信が強まってきました。書物って一冊一冊がバラバラに存在してるのではないんですね。一冊が独立していない。つまり比喩的にいうと、木みたいなものなんだけど、実はほかの木と繋がってる。引用するとか参照するというかたちでも繋がっているし、その作者がかつて読者だったというかたちでも繋がってる。自分で集めた本の背を、棚で眺めてみても、どこか主題が繋がっていたりする。そういう仕掛けとして、本の塊っていうのがあると思うんです。私と石井先生がともに専門にしている柳田国男の読書経験なんかを見てみると、本の塊との出会いがとても大きな意味をもっています。幼い頃に近くに住んでいた地方の蔵書家の家で本を読んでもらうんです。その蔵書は、図書館の役割を果たしていたんだと思うのです。三木家の蔵書、小川家の蔵書、そして成人してからの内閣文庫という大きな本の集積、まるで森のように集まっている本の塊を読むことで、彼は作者として、思想家として自立していくのです。書物を集めた図書館にせよ、個人の蔵書にせよ、たぶん「森」のイメージで捉えられるような気がするのです。なぜ「倉庫」ではなく「森」ととらえるのか。この空間自体が生きているからです。その森の中にはさまざまな木がある。多様な木があって森を作っている。読まれない本もたくさんあるんですよ。だけど、それもやはり一つの生態系、言葉の森を作っている一部分であることを忘れてはならない。その時に流行る、つまり読まれる本だけに価値があるわけではない。読まれる本だけに注目すると、森でも木材として期待できるスギだけ植えようかとなる。そうすると花粉ばかり飛ぶような環境で、みんなが花粉症になるとか、ある種の画一化が進んでしまいます。ですから僕は「森を育てる」と言うか、「里山を作る」ということは、図書館にとって重要な一つの理念になるのではないかと思います。

石井 「図書館は森である」という提言がありました。確かにそれで、図書館の森を育てなければいけないと思います。でも、一方で生命体としての森であるならば、光がなく、水がなく、栄養がなければ枯れてしまうこともある。一方で、どのように育てるのかということを開き違えたら、枯らしてしまうのではないかと懸念があることを自覚しなければなりません。そういう意味でも、生命体として図書館を考えるべきだとするご提案を受け止めたいと思います。

塚田 森を育てるといってお話が今、先生のほうからございましたけれども、その森の資源が枯れようとしている。もう皆さんの図書館も予算逼迫って、ただならぬ問題かと思えます。当院でも例外ではありません。この棒グラフ、青いグラフは人口。人口はどんどん減少していきます。今がピーク。ところが医療費のピークは、静岡市の場合ですと2025年にやってきます。今日はこの説明を省きますけれども、だんだん高齢の方が、医療費のかかる年代の方が増えてくる。人口問題研究所医療費の推計に基づくデータからこのようになっていきます。このような中で、財政は、何とかこれを抑えようということに今、やっきになっているわけですね。例えば、静岡県の場合では、肺がんの新しい治療薬オプシーボというのが、最近新聞でもご覧になった方、多いかと思えます。今年になってからだけでも、このオプシーボの医療費請求1億2千万円。皆さんのところの図書予算と比べてどうですか。去年が1千6百万円だったから、ものすごい増加ですよ。それが私たちの保健医療費に、跳ね返っても来るということです。何とかこれを抑えるために、図書館もそういうことにははや無関心ではいられない。つまり、本来の森を守るために、このようなところにも目を向けなければ、王道としての図書館を守っていけない、存続の危機にあると言っても過言ではないかと思えます。図書館にできることはたいへんたくさんあります。例えば、食事療法の本とか、レシピの本とか、健康に関する予防の本とか、こういったものは、むしろ病院や保健衛生機関よりも図書館のほうが強い。なぜなら、病気になった方しか、病院には来ないからです。ピフアとアフターをケアできるのが、図書館の大きな強みだと思います。そこをもっと行政、あるいは財政、そして市民の皆さんにもアピールしていただきたいと思えます。また、県立中央図書館が、図書館の中で、町の保健室という取り組みをすでに進めていらっしゃいます。これは大きなアピール材料です。つまり、敷居の低い、誰でも来られる、そして無料で利用できるということは、セーフティネットとして大きく、行政も注目しているところです。

石井 今、財政難の中でありながら、一方で医療費がどんどん拡大していき、少子高齢化社会・人口縮小社会において、さらに厳しくなるだろうという未来予想図があるわけです。けれども、塚田さんからは、図書室・図書館というのは、まさに命を支えるインフラであり、私たちはガス・水道・電気が途絶えてしまえば非常に困るようになり、図書館がなくなれば命さえもおびやかされることになると思えます。



パネリストの佐藤 健二 氏



パネリストの塚田 薫代 氏

## 情勢報告（抜粋）

報告者 やまもと ひろよし 山本 宏義 氏（日本図書館協会 副理事長）

### 【危機と図書館】

石井 今日、テーマにあげられている「災害時の図書館のあり方」について少しお話してみたいと思います。結論から申しますと、図書館は、一つは防災のために大きな機能を果たすのではないかと、もう一つは復興のために機能を果たすのではないかと考えられます。塚田さんの話にならえば、災害の前と後で果たすべき役割があるということになるかもしれません。復興については、図書館が東日本大震災からの復興に持続的に関われないかということを考えてきました。私は昔話を研究してきましたので、実際に人と人が向き合っていて語り聞かせることで、人と人がつながる場所に関心を持っています。昔話の場合には、岩手県ならば「むがす、あつたずもな」というような方言で語られるので、そうした地域の言葉の持つ働きを改めて認識してみたいと考えてきました。図書館は持続的な復興支援の拠り所になるのではないかとこの立場から、釜石をはじめ、さまざまな図書館と一緒に活動してきたわけです。防災については、関東大震災の際に書かれた震災作文に注目しました。静岡県では伊東、下田に行き、相模湾沖を震源地とする地震をどのように受け止めて、図書館がそれをどのように活用しているのか調べました。その時に、伊東の宇佐美の小学校の作文集が伊東市立図書館から、1994年に『こわかった津波地震：関東大震災を体験した宇佐美小学校全児童の作文集』というタイトルで出されていることを知りました。それを読んでいくと、高等科2年生が「僕らは大ぜいで外で遊んで居た。ガラガラという一音に僕らは「地震だ、地震だ」と言いながら竹やぶに飛び込んだ」と書いています。避難するのは、竹藪なんですね。「僕はおばさんを連れてお宮様に行った」という記述も出てきます。つまり、一段高いところにある神社が避難所になっているわけです。そのようにして子どもたちに書かせた作文をよみがえらせてくれているのは貴重な出版です。私自身は、こういった子どもたちの声に耳を傾けながら、災害と向き合う心を育てたいと考えています。

塚田 石井先生がおっしゃっているように、先人がどんなふうにしてその危機を乗り越えてきたのか。医療の世界で言えば闘病記のようなものを読んでその知恵を授かる。あるいはその危機から抜け出す心構えを教えていただく。それに備えるというようなことができるわけですね。

公立図書館の設置率は、町は62%、村が26%ということで、町あるいは村には、まだ図書館のない所があります。静岡県は、町で図書館条例が設置されていない所が1ヶ所ありますが、実質的には文化会館に図書室という形で活動されており、実質的には100%と書いていいと思います。

貸出の状況は、総数では2011年から減少に転じております。スマホや携帯端末などの電子媒体を使った情報入手が進んできていることが原因だと思います。資料費は、1999年をピークに減り続け、現在はピーク時の約8割です。この点も貸出の減少に影響していると思います。

職員は、専任の職員が減って、その分、委託とか派遣が増えております。司書の割合は専任が2015年では52%、非常勤や臨時が56%、委託や派遣が58%になります。専任職員が減った分を非常勤・臨時などで補っています。

指定管理者は、毎年少しずつ増えております。図書館の数にして469館、全体の図書館の中での比率は、14.5%です。

学校図書館については、文部科学省の「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」の報告が10月20日にあり、学校図書館のガイドライン、学校司書のモデルカリキュラムが示されました。

大学図書館では、NACSIS-CATについて、「NACSIS-CATの再構築について」、「NACSIS-CATの軽量化、合理化についての基本方針」が示され、紙媒体と電子情報資源の総合的な検索環境を作り上げることが大きな目標として掲げられました。

最近の注目すべき事項として、従来、市町村の地方交付税に図書館協会の経費が盛り込まれていなかったのが、平成28年度から盛り込まれることになったことがあります。

まち・ひと・しごと創生総合戦略と図書館について、一昨年、法律ができ、それぞれの自治体で、5年計画の総合戦略を立てることになっております。図書館事業も計画に盛り込んでいっているところが増えてきておりますので、ホームページ等で御覧ください。

災害と図書館という点では、日本図書館協会内に、昨年12月に図書館災害対策委員会を常設の委員会として設置しました。災害に対して情報収集、必要に応じて募金に取り組んでおります。静岡の場合は、南海地震の関係で、それぞれの取り組みがあると思いますので、その取り組みをお進めください。



コーディネーターの石井 正己 氏



山本 宏義 氏

# 分科会

## 第1分科会【図書館サービス】

「いま、あらためて「貸出サービス」の意義を考える  
～「ベストセラー貸出」批判と図書館の基本的な役割～」  
(参加者123人)

講師 田井 郁久雄 氏 (元広島女学院大学准教授)

図書館によるベストセラー本の大量購入と貸出について出版社や作家から批判が起こり、2000年頃から最近まで何度か論争が繰り返された。図書館側からも実証的な検証による反論がなされ、出版不況の原因は図書館の貸出と因果関係がないことが、おおむね理解されるようになったが、図書館サービスのあり方についての影響は残っている。

同じ時期に、ビジネス支援など課題解決型図書館が提案され、民営化も進行して、図書館の新しいあり方として主張されるようになった。このような一連の動きが関連しあって、従来から図書館の基本と考えられてきた「貸出サービス」への取り組みは、消極的になりつつある。ビジネス支援などに確かな実績や手応えがあるのか、市民がほんとうに求めているのか、目新しさを追うのが図書館の本質に沿うのか、確信が持てないまま、一方で、「無料貸本屋」という漠然としたイメージによる批判は、貸出サービスの本質と図書館サービスの焦点を見失わせてきた。

かつて『市民の図書館』が提案した「貸出」は、単に本を貸す単純作業ではなく、「必ず読書案内(資料案内)を含まなければならない」サービスだった。徹底した資料案内に伴って、本格的なレファレンスサービスも導き出される。「貸出」は職員が利用者と接し、資料要求を肌で知る機会であり、開架書架の棚づくりやフロアの工夫、そして資料選択にも生かすべき、専門職としての重要な仕事なのである。岡山市立図書館では、カウンターサービスを重視し、利用者との接点や会話を大切にしてきた。貸出数が多くて忙しい中でも、資料案内に取り組むという貸出サービスのあり方を意識的に実践してきた。

近年の図書館の動きは貸出サービスを矮小化させてきた。貸出カウンターの職員は非正規化され、民営化が進められ、貸出・返却・予約が機械化されるようになった。しかし、カウンターは図書館員の檯舞台であり、司書の生きがいの場であってほしい。

40年の間伸び続けてきた日本の図書館の貸出数は、数年前から減少へ向かっている。図書館資料の利用という、図書館の原点が衰退しようとしている今、一人一人の市民がさまざまな資料に出会う場をつくり、すべての資料を誠実に、確実に提供するという図書館の基本に立ちかえって、貸出サービスを大切に作る図書館づくりがなされることを望む。



田井 郁久雄 氏

## 第2分科会【幼児・児童に対するサービス】

「子どもと楽しむ科学絵本  
～科学絵本をもっと身近に～」  
(参加者173人)

講師 塚原 博 氏 (実践女子大学教授)

科学絵本を読み聞かせなどで普段使っているだろうか？扱い方が分からず戸惑っている方も多いのではないか。そんな科学絵本の効果的な活用法について、おすすめの作品を紹介しながら実践女子大学教授の塚原博氏よりお話しをしていただいた。

近年、年少人口比が減少しているなかであっても、児童図書の出冊数は増加している状況であり、今でも子どもが本をよく読む傾向に変わりはない。そんな子ども達とより良い科学絵本とを結びつけるための具体的な技法をとって、身近なものを使った科学あそび(実験)が効果的である。紙の切れ端を落とすとどのようにして落ちていくのかを観察したり(『風車をまわそう』)、卵を何も使わずに立たせるといった実験(『卵の実験』)などは子どもたちが楽しみながら参加してくれる。また『かわ』などの絵本を仕立て直して絵巻物のようにしたり、模造紙4枚を張り合わせて折り畳み展開図(『ぼくのいまいるところ』)を作ったりして、見せ方を工夫するだけで子どもたちは興味を持ってくれる。(『しっぽのはたらき』の読み聞かせや『しづくのぼうけん』のお話もしてくださったが、グループ向けには文字通り絵本を読んでやる読み聞かせではなく、ストーリーを自分のものにして絵本を使ったお話(ストーリーテリング)をすることをすすめられた。)

また科学の本に対する大人の役割として、優れた科学読物がたくさんあることを知り、実際に手に取って自ら読む事が大切である。活用できる作品のリストが掲載されている資料として『科学の本っておもしろい』(科学読物研究会編 連合出版 1981)のシリーズや『子どもと楽しむ科学の絵本850』(子どもと科学をつなぐ会編 メイツ出版 2002)などがある。

子どもは生まれながらに自然って美しいな、不思議だなと感動する心を持っており、子どもが持っている驚異の念、好奇心、観察力、探究心が育つ手伝いをすることが、大人の責任である。科学絵本というと、大人は子どもに何か教え込むための道具として考えがちだが、それを読んでただちに「かしこく」なるものではなく、「ゆっくりと間接的に、そして必ず」役に立つものである。「科学」という事で構えるのではなく、物語絵本や昔話絵本などと同様に科学絵本も楽しんで読むことが大切である。そうすることにより子ども達は身近なものへの興味から、楽しいこと、おもしろいこと、遊びの中で非常に重要なことを学びとることができる。



塚原 博 氏

### 第3分科会【子どもの読書活動】

「読む力が未来をひらく  
～子どもに本を手渡すために大人ができること～」  
(参加者389人)

講師 <sup>わかみ あきこ</sup> 脇 明子 氏

(ノートルダム清心女子大学名誉教授  
岡山子どもの本の会代表)

メディア依存が進行する社会の中で、子どもの発達を真剣に受け止めているだろうか。流動する社会にさらされている子どもの読書活動を、専門家の立場から掘り下げていただきたく、脇明子氏に以下のようなご講演をいただいた。

図書館ではしばしば、住民のニーズに応えなくてはという建前のもとに、漫画やビデオ等で貸し出し数を伸ばすようなことが行われているが、特に児童サービスにおいては、表面的なニーズに惑わされることなく、本当に子どもたちが必要としているものを提供していくことが、専門家としての義務である。

いま、子どもへの読書支援として行われているのは、主に「絵本の読み聞かせ」と「昔話の語り」だが、そこで終わりにせず物語の本を読み聞かせるところまで進んでほしい。なぜなら、このメディア依存社会のなかで子どもが生きる力を獲得していくには、「書き言葉」を読み書きする力を身につけることが必要であり、絵本や昔話だけでは、そこまで行き着けないからである。

子どもに読み聞かせたり勧めたりする本としては、ちゃんと筋が通っていて、主人公などに感情移入できる物語の本が一番だ。筋の通った物語の本を読み進めていけば、「生きる力」の重要な要素である思考力、想像力、記憶力が自然に育つが、雑な作品ではそうはいかないし、知識の本やエッセイもそれには不十分である。さらに、主人公に感情移入できるような作品なら、主人公と一体化しつつ、保護者のような視点も持つことで、自己認識力が育つし、主人公と逆境をともにすれば、自分自身、逆境に耐えていく力が育つ。思春期という嵐の海を渡るに際して、この力が身につけているかどうかは死活問題である。

もうひとつ大切なのが、「書き言葉」に親しむことで、「書き言葉」を読み書きする力を身につけてこそ、複雑な問題を解きほぐして解決策を考えたり、自分の心のなかの嵐を鎮めたり、自分の考えをきちんと伝えたりすることが可能になる。子どもたちへの読書支援は、そこまでの見通しを持って行ってほしい。



脇 明子 氏

### 第4分科会【図書館とユニバーサルデザイン】

「図書館の「顔」はこれでいいの  
～魅力を伝えるホームページの条件～」  
(参加者67人)

講師 <sup>にかみ こうじ</sup> 仁上 幸治 氏

(図書館サービス計画研究所代表)

対談者 <sup>まえだ ひろき</sup> 前田 宏希 氏 (掛川市立中央図書館)

図書館のホームページをいかに魅力的にするか。仁上幸治先生に講演をお願いし、掛川市立図書館の事例発表についてコメントをいただいた。

派手さや多機能を前面に押し出す最近のホームページの対極にあるシンプルなデザインの例として俳優の阿部寛氏のホームページを紹介。「必要なコンテンツをしっかりと公開」「随時更新されている」ことを強調し、ホームページに関するデザイン以前の問題として、表現や言葉遣いの文法上の間違いや利用者の目線に立っていない表現等「伝えること」に対する意識の低さを事例を挙げて指摘した。

次いで、前田氏の発表。システム更新時にスマホやタブレットに柔軟に対応するため、レイアウト・デザインを異なる画面サイズにより調整できるレスポンシブデザインを採用した。利用者が頻繁に使う機能を上に、あまり見ない情報は下部のサイトマップにおき、不要なコンテンツは大胆に切り捨てた。Twitterを開始し、館長自らが発信していることも紹介した。

掛川市のホームページを仁上先生が講評。良い点として、①最初に業者と接触する際に方針や原則があった②絵コンテが作ってあった③館長にTwitter発信の役割を担わせた④画面を上部と下部に分けた箇所について民間企業の手法を参考にした⑤方針や原則通りに設計されていて「やるか、やらないか」の割り切り方が良かったの5点が指摘された。

続いて質疑応答の中で、Twitter、Facebook等のSNS導入館の参加者より「組織全体のガイドラインがあり、どうしても固くなりがち、もっと親しみやすくできれば」という発言があり、事例発表者・前田氏から「外枠を埋められると『やっちゃえ』ができない。人が変わると方針も変わってしまう恐れがあるので、運用の力加減が難しい」との意見があった。仁上先生からは、「固さをどれだけ守り続けたいか、親しみやすく市民に溶け込んでいきたいのか、ポリシーが問われている」と回答があった。

最後に、仁上先生から、わかりやすく伝わる文章を書くには、広告業界の技術を学ぶとよいこと、館のホームページの個性を考える大前提として親組織との共通性が土台であること、図書館職員が個別に悩むのではなく、地域全体で助け合えるような情報の共有・交換・質問回答の仕組みを作ることが効果的であること、改善前と改善後の報告会を行うなど研修成果のフォローアップが重要であることなどの提言があった。

とにかく「やるか、やらないか」まず一步を踏み出そう！という前向き姿勢が共有できた、図書館業務の全てに繋がる分科会となった。



仁上 幸治 氏

## 第5分科会【学校図書館】

「学校図書館発！  
～授業で使える情報ファイルの作り方現状～」  
(参加者86人)

講師 藤田 利江 (江戸川区教育委員会事務局指導室  
学校図書館スーパーバイザー(SLS))

教員として、学校図書館スーパーバイザーとして様々な仕事をされてきた藤田利江氏は、授業の際、教科書だけではなく様々な資料を活用したことを起点として情報ファイルの作成、活用に取り組んでいる。藤田氏から次のような話をうかがった。

調べ学習などで必要な新しい情報は、学校図書館にあるような本にはあまり載っていないことがある。そういう時は身近で配布している地域の情報やコラムなどが書かれている冊子、駅に置かれているフリーペーパー、インターネット上の情報や社会見学でもらったチラシ、子ども版広報紙など、様々な資料が情報源として役に立つ。授業の内容に合わせたテーマ・件名で資料収集を行い蓄積していけば、学習に活用する情報ファイルを作ることができる。

今回の分科会では、参加者が各自新聞を持参し、記事のまとめ方のレクチャーを受けながら明日から使える情報ファイルを作成した。ファイル入れも牛乳パックを再利用したもの。お金もかからず、簡単にテーマや件名を増やすことができる。作成した情報ファイルは、児童生徒に積極的に紹介する。「新聞の情報は使える、わかりやすい」ということがわかれば、児童生徒は直接新聞を活用するだろう。情報ファイルは、児童生徒と図書館資料をつなぐ役目も持っている。

現在も学校図書館は「読書センター」という意識が強い。学校図書館法で言う「教育課程の展開に寄与する」ための「学習センター」「情報センター」として活用するためには教職員の意識改革が重要である。また、「学校司書」と「司書教諭」の職種の違いが理解されていないことが多いのではないだろうか。学習指導要領には「教師による評価」と書かれている。このことから、評価をする者が指導を行うべきではないかと考える。図書館資料を活用する授業では、教員が指導を行い、学校司書は資料相談や資料提供、レファレンスを行うことになるだろう。

司書教諭の活動時間が確保されていない、学校司書が常時いないなど学校図書館の問題は山積みだが、授業で図書館を活用する、学校司書を配置するなど状況はどんどん変わってきている。ある司書が「先生が頑張れるように頑張る」と言っていたが、教師も学校司書も頑張れるように知恵と力を出し合い、まずは出来ることから実践していくようにしたいものである。



藤田 利江 氏

## 第6分科会【大学図書館】

「NIIと大学図書館との連携・協力について  
～NIIの学術コンテンツ事業の動向～」  
(参加者36人)

講師 吉田 幸苗氏 (国立情報学研究所 学術基盤  
推進部 学術コンテンツ課 副課長)

国立情報学研究所(NII)は、30年以上にわたり教育・研究にとどまらず大学図書館等と連携しながら、多様な学術コンテンツを確保・整備・提供する事業を行ってきた。平成22年(2010)10月には、国公私立大学図書館協力委員会と国立情報学研究所との間における連携・協力の推進に関する協定を締結し、この協定をもとにさらに事業を展開している。近年では電子資料や各種データベース等の導入が進んだことにより大学図書館がNIIに求めるものも変化してきた。NIIが提供する学術コンテンツも様々に検討を重ねている。

NII-ELSは今年度末で終了するため、各機関の意向によってJ-STAGE等へのデータ移管を進めている。リポジトリについては、JAIRO Cloudを開発・提供し、中小の大学図書館でも機関リポジトリを構築できるようになってきた。また、機関リポジトリの振興・相互支援を目的としたコミュニティ「オープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR)」を設立した。研究成果だけではなくそのプロセスや研究データ等もオープンにしようという国際的な取組みに対して積極的に連携を図っている。NACSIS-ILLは、電子ジャーナルの増加により利用件数は減少傾向にあるものの、現在でも一定件数の利用はあるNACSIS-CATは階層をフラットにすることでMARCデータの利活用を促進し、書誌調整等のコミュニケーションコストを削減するなどの再構築を検討している。さらに、ERDB-JPを平成27年4月より運用開始した。日本で刊行された電子資源のナレッジベースを、大学図書館・業者等と共同構築・運用を行っている。CiNiiと併せて電子・紙媒体の学術情報を迅速かつ的確に得られるよう電子リソース共有環境の向上を図っている。

若い力を育成することは大学図書館員としての責任である。NIIやそれ以外の研修に講師としても積極的に参加してほしい。また、データの世界には国境はなく、国際連携活動を推進していくことが求められる。今後も大学図書館はもとより国立国会図書館、科学技術振興機構等とも連携・協力しながら、事業を展開していく。

参加者より質問があった県立図書館と大学図書館の連携の例として、NACSIS-CATを利用した政令指定都市や病院図書室との相互利用が紹介された。本県では静岡大学附属図書館と県立中央図書館との間に定期便を運行し、相互貸借に活用していることが紹介された。



吉田 幸苗 氏